

異なるもの同士の結びつき

小原 秀雄 (女子栄養大学名誉教授・1927年生)

先日、嗜好品文化研究会なる会のフォーラムで、話をさせられた。いろいろと勉強になったが、動物の好き嫌いと人間の好き嫌いがテーマであった。

報告の一つに、イヌやネコの好き嫌い調査があった。後に研究会でまとめて発表するのだろうが、聴いていて感じたことの一つは、20年間の変化は人間の食の変化と連動しているのではないか、ということであった。イヌ・ネコの調査は20年前からの追跡は勿論ないようだが、アンケートでの飼い主からの答えの一つに、家族の一員と見做す例が、イヌ:85%、ネコ:82%余であった。より大切、との答えもイヌ:3.5%、ネコ:5.6%あった。問いに対する飼い主達のこの答えは、明らかに「愛情深さ」を示している。とは言え、ヘソ曲がりの私が考えるのは、イヌ・ネコの自立性についてである。

イヌやネコの食についての答えは、90%以上がペットフードであるが(主に都市部での調査)、ペットフードの普及はこの20年間では相当な増大と思われる。いろいろな条件がその理由として考えられるが、手軽さと栄養上偏りが無いと信じて、などが主なものだろう。何が問題かと問われれば、イヌ・ネコの生態の上からである。「食」の変化は生態の上では大変化である。いうまでもなく、これは飼い主の問題であるよりは愛玩動物となった動物の宿命(?)であろう。勿論、ペットフードの問題ではない。「愛情深い」特別な関係の問題点であろうが、個人の問題ではない。他の種への寄生であるとも言える種間問題だ。

野生動物が自分以外の他の種との間に、特別な関係を結ぶことはあるのだろうか。捕食と被食という食物連鎖や寄生のような関係でない、特殊な友愛関係を、である。勿論、動物が飼われれば生ずる。いくつかの種の混合飼育を行う動物園などで、あると言われる。また、子どものうちから飼われれば、ネコとネズミの間にも生ずる。外国での実験例だが、ネコがネズミを育てた例があり、そのネコは養子ネズミと同じ種のネズミを捕殺しながらも養子ネズミには手を出さなかったのである。ライオンの子やトラ、ヒョウなどにも養子はともかく、同居すれば同じような事実が知られている。

最近、ケニア北部のサンブル保護区で、なんと野生のライオンが獲物の1種であるレイヨウ(ウシ科)のオリックスの子を養子のようにしていたという話を聞いた。しかも、1頭のオリックスが成長して離れた後、次の子にも同様にしていた、というのである。この話はその後確かめようもなく、ライオンをめぐる環境(つまり、近くの野生ライオンの状態など)についてのその後も耳にしていないが、「話」つまり、「作り話」ではないのは確かである。この例は、獲物にする動物なので、奇妙さが残る。しかしながら、他の種の共存を許している例は、広げて

見ると少なくない。塩舐めが対象でも水飲み場でも野生動物が他の種と資源を共有するのは普通である。もちろんゾウが来るとキリンやイボイノシシは道を譲るように、大きいものが先になるから、共存ではないといえるかもしれない。しかし、ゾウが枯れた川の川床を掘って伏流水を飲み、その後を



他の動物がその井戸を利用するのは「自然な」公共事業(?)である。こうした見方ではなく、直接的にはサイと鳥のウシツツキとの共生が有名だ。アフリカのクロサイやキリンからも皮膚にウシツツキが群がるのを許している。サイの皮膚に群がる虫をウシツツキが食べるのである。しかし、もし虫が思うように捕まらなると、ウシツツキはサイの皮膚について血を舐める。サイにしてみれば、ウシツツキが異常を感じて飛び立つのが危険のシグナルになる。サイは聴覚は鋭く、嗅覚もまあまあだが、視覚がさっぱりなので、ウシツツキはそれを補って余りある哨兵の役に立つ。鳥は視覚の動物なのである。

アフリカのブッシュでは、クロサイかキリンからウシツツキが飛び立つ(時にはアマサギ)のがよく見られた。過去形で表現したのは、20世紀のはじめに20万頭とかいわれ、半ば頃でも6万頭が確かな数としていわれた、全アフリカのクロサイが、現在は3,500頭ほどになってしまったからである。私がアフリカに1966年に始めて行ったときは勿論、1974年でさえケニアのツアボ地区は至る所に居た。ところが、1980年代にはめったに見られなくなった。とはいえ、サイと鳥との共生関係は特別ではなく、大型動物の体表に寄生する虫を捕食する鳥類は多い。また、体内にまで考えを進めると、私達の体には菌類が多様に棲んでいる。さらには、全ての生物は食物連鎖をはじめとして相互関係を結び、野生生物界をつくっている。ライオンとその獲物とも、見ようによっては、共生関係になっている。個々の個体間では食う・食われるとなるが、食われて絶滅する、などは自然では起こり得ない。種間のレベルでは「相互適応」といわれるように、本来は否定的ではない。とはいえ愛玩動物のような親密な関係とは差があるが、他の種の動物、あるいは動物と植物の間にさえ、それなりの種間関係が広く成立している。全ての種がなんらかの他の種との関係を成しているからこそ、エコロジーといわれる生態的關係が地球全体に広が

っているのである。

「家族の一員のように」と人間にいわれるイヌ・ネコとヒトとの種間関係も、野生、つまり自然の世界での種間関係から由来している。「食べてしまいたいほど可愛い」という表現は、愛する立場からは穏当に思えるだろうが、愛の由来には食物連鎖が働く「好ましい」という心理と無縁ではないのではなかろうか。

飼いなすとか、特別な利用は人間が設けた種間関係である。動物側からは悪智恵の犠牲になっていると見做されるだろうが、それは、食われる産業家畜だとして、愛玩動物は子ども時代の依存行動をそのままに人間に飼いなされるか、あるいはイヌのように従順な群れの一員となっているつもりなのかもしれない。イヌもネコも、人間に飼われると、野生の時代と最も大きな質的な違いの一つは、食生態上である。自力で食を得なければならなかったのが、全て供給されるのだ。人間でいえば、失業しながら遊んで暮らせる身分に近い。しかも、遊びは飼い主が支配するのである。これは、しつけられてはいるが、つながれているイヌのありかたの課題である。それなのに「愛情深く」「家族の一員」との考え方が、人間同様(ヒトと同じように扱うこと)と思いでいる人が多いのではないか。また、品種改良を重ねて、玩具犬や座敷犬となったイヌが、DNAを介して体内に保存されている性質と与えられた運命的条件と、どうイヌ自身の心理の中で折り合いをつけているのだろうか。又、自身を品種形成や環境条件との適応をどのようにしているのか、という問いでもある。ネコについても、その野生への生態がイヌとは違うが、問題点の本質は同じであろう。イヌの先祖は少なくともオオカミ類縁の動物であることはまちがいない。しかし、日本ではニホンオオカミは絶滅したし、飼育されているオオカミでは本来的にこのような比較の対象には成り難い。仮にオオカミがいたとしても、飼育するとイヌ化しやすいのである。

思い出すのは旧ソ連で、森林と草原の接点にある生態圏保護区へ親友の科学アカデミー幹部会員だった故ソコロフ博士の配慮で訪れたとき、森番が飼っていた雌オオカミである。別に特別な亜種でも個体

でもないのだが、実によく馴れていた。子どもの頃から飼われていたというだけあって、私の娘と喜んで遊ぼうとして、舐めまわして、全身でイヌ化を示していた。日本では野生的な原型をどのように比較生態の対象とするかといえば、野生のイヌ科動物か、二次野生化したイヌを考察の対象にするのが順当であろう。しかしながら二次野生化したイヌは、原型的な性質を保存し、現しているとしても、それは都市化・人為化された生活場所でのことである。日本の自然に住むイヌ科動物は野生のキツネとタヌキとの2種である。

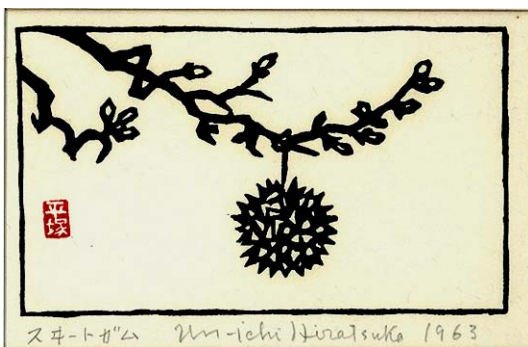
全ての動物の種は、それなりに生活場所に適応している。先祖から受け継いでいる形態や生理・生態(形質)は、生活場所の環境変化に適応せずにはすむ場合は、先祖から受け継いだままで残る。キツネはタヌキよりも多くの部分で新しい適応が進んでいるように見える。細かい説明は許してもらおうが、キツネのほうが新しい形質を備えている。

つまり、タヌキは原始的なイヌ科の動物である。原始的形質を保っているといえるのには二通り理由がある。特殊化していない一般的な形質のままであるということと、もう一つは古い形質を保っているものだが、それなりに特殊化しているものだ。後者は分かりやすい例では南米のナマケモノやアリクイである。イヌ科ではヤブイヌやタテガミオオカミなどである。タヌキは一般的な形質を保っている例である。昔から最近までは古い生活場所(ハビタート)がそのまま保たれていたためである。ところが現代の日本ではキツネよりもタヌキの方が都市化に適応して(形質はまだ変化していないが)暮らしている。一般的な形質は融通がきくからである。

ある夜、ほとんど人通りが絶えた夜半、特に遅くなって帰ってきた私は、自宅の近くでどう考えてもタヌキとしか思えない動物が道を横切って走るのに出会った。ほんの数メートル、あっという間だった。我が家は東京23区内ではあるが、石神井公園に近く、所々に空き地がある。とはいえ、眼を疑った。後で調べると、都市動物の研究者はタヌキは石神井公園あたりにはまだ住んでいるといていたのである。タヌキの食物に対する適応力は広く、ラーメンや菓子パンなどを食べる。その事例は大分昔であるが、鎌倉で私自身が調べて確認した。餌付けが可能なのはよく知られている。

タヌキが出没するには、イヌが繋がれていることが好条件となる。タヌキにはイヌが天敵となるからだ。

人間と野生動物との関係はいまは行政上の施策を含めた関係となって、「管理」が圧倒的である。一方では動物愛護の流れの急速な高まりを受けて、「保護」が付け加えられて「保護管理」と標榜されている。人間生活が経済成長のスケールで語られるようになった実態の反映であるが、山岳の多い我が国と過疎が進む状態もあるため、野生動物がなおも生きている。単純化していえば、タヌキは人間と接近して生きていられる種なのである。



五味蔵

イヌの原型として遙かに遠くはあるが、タヌキを見て感じたことの一つは、イヌ科は人間との関係を結びやすい動物群だということである。人間が家畜化した動物は、動物側の性質よりも、人間側の要望のほうが強いのであろうが、イヌについての家畜化の要件には一つには適応力に富む点があると思う。タヌキはまた雑食的でもある。「食」という、動物にとって最も基本的な生活で、雑食は変化に耐える能力の一つであり、「家族的」に成り得る要件であった。ローレンツ博士がジャッカルをイヌの先祖と最初考えた（後にオオカミと修正）のは、人間の残飯で生きられる食生態による。人間と野生のイヌとには、食物連鎖をつくる可能性があったのである。ネズミが穀物を盗み、ネコは大量のネズミを捕食する。その能力を人間が利用した、というのが、ネコの愛玩動物化の仮説の一つだが、イヌは残飯を求めて人間の集落の近くで生活する個体群が、次第に人間と結びついた、との仮説がある。その間に人間の子がイヌを愛したとか、狩りの獲物を追うようになったとかいわれ、また、猛獣その他の危険が近付くとき、イヌ同士にも飼い主にも吠えて知らせることが、番犬の役に立ったとかの諸説がある。時にイヌを人間は食べたにちがいない。ともかく、一つの種間関係を作ったのは確かである。

以来、かなりの長期・2万年前後にも及ぶ関係の中で、まだ人間の側もイヌの気質の全てを知ってのコミュニケーションが成立しきってはいない。イヌの品種改良が（改良とイヌ側からいえるかどうか）人間とイヌとの関係を築き上げるよりも、人間側の要求、それも経済的な要件が一層急速に大きくなっていることに基く品種の増大である。品種にもよるがこの性質も「自然のまま」の野生状態が全て残っているわけでもない。こうしたイヌ論や、イヌ学は、私の及ぶところではない。しかし、次のような事例は、示唆的である。

私の畏友の一人、書誌学者として日本の第一人者紀田順一郎氏が知らせてくれた雑誌記事に、イヌに攻撃されたときに両手のひじを張って、攻撃を抑え

られる、というのがあった。ただし、最近のものでは無く、記事は絵入りであった。しかも、紀田氏ご自身がそのような経験があるとのことであった。私はその後、友人や知人の獣医師や動物学者の何人かに尋ねたが、そのような事例は知らなかったとのことであった。これは、ほんの一例で、よく、人間が走って逃げては、イヌをかえって挑発するとか、あるいは自宅では温かなイヌなのに、と、繰言で言い訳をしながら、子どもを咬む事故を起こす例がある。

ドーベルマンのように、攻撃性強化の品種も人間は作り出した。「見かけ」が人間の「かわいい」を誘発するような玩具的愛玩犬が登場した。さらに、よく売れるイヌ・ネコへの要求は、変化しつつも終わり無く働くだろう。こうした愛玩動物への市場の要求は人間の心理からも、絶えることなく続くと思われる。イヌ側に立つ愛護者は、どう対処するのであろうか。それはまた、人間の野生動物を含めた動物との「種間関係」及び「個体間関係」が21世紀にどうなるのかの代表的な例となろう。

付記

具体的な提案ではないが、「食」が満たされたイヌ、活動的な動物である彼らには飼い主との運動だけで我慢しているのはどんなものだろうか。仕事も悪くないとも思うが、たっぷりと体を動かし、気晴らしできるような方途を、特に狭い日本の都市では、考えてやるとよいだろう。とはいえ、それが果せなくても、人間の愛にこたえるだけの品種が作り出されるかもしれない。私は古いイヌ観の持ち主なのだろうか。（了）

筆者の紹介

1927年東京都生まれ
1969年～1998年 女子栄養大学教授(生物学)以降、同名誉教授

『専門』・哺乳類学(動物学)
・人間学 環境科学(自然保護論)

『主な経歴』

1946年: 国立科学博物館動物学部助手
1950年: 著述業 非常勤講師 等
1969年: 女子栄養大学教授(生物学)
1998年: 定年 同大学名誉教授
その間、長崎総科大客員教授、総理府動物保護審議委員、他など

『受賞歴』

1966年: 毎日出版文化賞
1982年: 自然動物保護功労賞・
世界野生生物基金(WWF)
1988年: グローバル500賞・国連環境計画(UNEP)
2003年: 産経児童出版文化賞



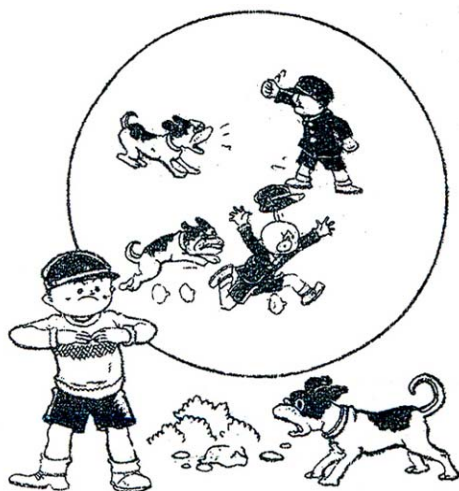
『現在の主な役職』

(財)日本自然保護協会元理事長・現在顧問
(NPO法人)野生生物保全論研究会会長(JWCS)
日本環境会議代表理事
アフリカゾウ国際保護基金(AEF)理事
自然の権利基金代表理事
葬送の自由をすすめる会理事
総合人間学研究会代表幹事
環境持続社会センター顧問
総合人間学研究会代表幹事
人間学研究所名誉所長
ヒトと動物の関係学会顧問
野生動物保護学会顧問
国際自然保護連合(IUCN)役員 ほか。

《最近の著書》

ぼくは野生動物の弁護人(ポプラ社)
多様性と関係性の生態学
(川那部浩哉と共著・農文協)
教育は人間をつくれるか(農文協)
きみの体が地球環境・全5巻(農文協)
おもしろ自然動物保護講座(東洋書店)
レッドデータ・アニマルズ・全9巻
(共編・講談社)
現代ホモサピエンスの変貌(朝日新聞社)
都市動物の逆襲(東京書籍)
ゾウの歩んできた道(岩波書店)
親と子の動物行動学(教育出版)ほか。

アルバート・テルーイン



いぬ
おそ
犬に襲われたら

その場に立ちどまつて、両手を胸のあたりへおきなさい。
かうしているあなたに咬みつく犬はまづありません。手を振り上げておどすのは危険です。逃げ出すにはもつと危険です。犬はあなたに追いついて、もつとひどく咬みます。

「少年倶楽部」一九三六年十二月号付録より
書誌学者 紀田順一郎氏提供